OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自己注目による認知機能およびネガティブ感情への影響：行動的側面に着目して
Author(s)	村中, 誠司
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72470
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（　　村中　誠司　　）	
論文題名	自己注目による認知機能およびネガティブ感情への影響：行動的側面に着目して

論文内容の要旨

1. 目的と論文の構成

本研究の目的は，社交不安症を維持する一要因である自己注目の機能性を行動的な観点から区別し，非機能的な自己注目が他の非機能的な認知機能やネガティブ感情に与える影響を明らかにすることである。

本論文は3つの研究と1つの事例から構成される。研究1では社交不安のサブタイプ間でビデオフィードバック前後の生理的反応および生理的反応に関わる認知機能の継時的変化を比較検討しており，自己注目と社交不安との関係を示唆する結果を示している。研究2では，自己注目の機能性を，自己に関連する単語（以下，SRW）を列挙する行動的な指標から区別することを試み，非機能的な自己注目と関連するSRW指標がネガティブな反復性思考に与える影響を明らかにしている。研究3では，日常的な場面でのSRWとネガティブ感情との関係を経験サンプリング法を用いて測定し検討しており，日常的な認知や感情を測定する重要性を示すとともに，非機能的な自己注目に関わるSRWは日常的な自己注目を高めやすい傾向を明らかにしている。事例では，筆者の臨床実践からクライエントとの面接過程からみられる自己注目スタイルの変容を考察し，自己注目スタイルを機能的なものにシフトさせるための方法論には，各個人の情報処理のスタイルにあった方法が選ばれるべきである可能性を示唆している。

2. 総括

本研究は以下4点を明らかにした。

1) 研究 1 の結果から，全般型の社交不安サブタイプは他のサブタイプと比較して社交不安曝露時の生理的反応の程度が同程度であっても，生理的反応について他者からネガティブな評価をされると考えやすい傾向がある。
2) 研究 2 の結果から，SRW を多く出すほど機能的な自己注目傾向が高く，ネガティブな SRW との関係性を強く感じているほど非機能的な自己注目傾向が高い。また人前で失敗した場面を想定した時の不安の高まりはネガティブな単語との関係性を高め，ネガティブな反復的思考を高める。
3) 研究 3 の結果から，日常的な場面でネガティブな SRW との関係性が強い時は日常的な自己注目が高く，この自己注目が日常的なネガティブ感情を高める。
4) 事例から，自己注目スタイルが機能的なものにシフトされるための方法論は，SRW のようなテキストベースなものだけでなく，視覚的な情報から自己に対する注目が促されることもあり，各個人にあった方法論がとられることが求められる。

3. 論文の概要

3.1. 研究 1

社交不安症とは，「他者からの注視を浴びる可能性のある状況で著しく不安を感じ，社会機能が著しく低下した状態が少なくとも6ヶ月以上持続した」精神疾患である。社交場面には，人前でパフォーマンスを求められる場面と他者と交流する場面に分けられ，主にどの場面で不安が高まりやすいかで区別されるサブタイプの存在が明らかとなっている。また，社交不安症への治療法としてビデオフィードバ

ックが挙げられる。しかし，ビデオフィードバックの効果には未だ不明瞭な点があり，その背景に社交不安サブタイプごとにあったフィードバック方法が選択されるべきであることが指摘されている。これまでにサブタイプ間でビデオフィードバックによる認知機能の変化を比較した例がなかったため，本研究では，サブタイプ間で生理的反応に対する認知機能がビデオフィードバックの前後でどのように変化するか比較した。

33名に対し，ビデオカメラの前でスピーチをするよう求め，この映像からスピーチ中の自己の様子を客観的に振り返ることでビデオフィードバックを行った。またこの間の精神性発汗を測定し，スピーチ前，スピーチ後，ビデオフィードバック後の3時点の生理的反応に関する認知機能を質問紙法で測定した。実験の結果から，全般型（どの社交場面対しても強い不安を感じるサブタイプ）は，他のサブタイプと同程度の精神性発汗の増加率であったにもかかわらず，生理的反応に対する他者からのネガティブな評価を過剰に怖れていることが明らかとなった。

3.2. 研究 2

研究1の結果から，実際の生理的反応に対して過剰にネガティブに捉える傾向が示唆されているが，このような自己の状態に対する注目の偏りは自己注目理論で議論できる。自己注目とは，「自己に関連した気づきであり，内から生み出される情報」である。自己注目には機能的な側面も存在することが明らかとなっており，いかに機能的な自己注目スタイルにシフトできるかを検討することが提案されている。しかし，自己注目スタイルが持つ行動的な特徴については未だ不明瞭な点が多く，具体的な自己注目スタイルをシフトする方略が示されていない現状にある。また，自己注目は特性的な概念であり，不安などのネガティブ感情が高まった際の状態的な変化を捉えることが困難である。一方で，「ネガティブな内容の思考を受動的に繰り返す状態」と定義される反復性思考が症状の重症度や維持を予測するために有用であることが指摘されている。ネガティブな感情が生起した際のSRW指標による反復性思考への影響を併せて検討することにより，自己注目の機能性を区別するだけでなく，今後SRWの列挙行動に対する操作によって反復性思考の改善を期待することができ，機能的な自己注目スタイルにシフトするための新たな検討課題を指摘できると考える。

146名に対する質問紙調査の結果から，機能的な自己注目スタイルの高いものはSRWを多く出す傾向があり，非機能的な自己注目スタイルの高いものはネガティブなSRWとの関係性を強く評価する傾向があることが明らかとなった。また，不安が増大した際にネガティブなSRWとの関係性は強まり，ネガティブな反復性思考を高める影響関係が示された。

3.3. 研究 3

研究2では，自己注目の特性的な指標では自己注目の変化を捉えることは困難であることを指摘したが，自己注目の測定は，ネガティブなイベントに直面した時に測定するよりも，後に振り返って測定した方がネガティブに歪んで回答する傾向にある事が指摘されている。社交不安の文脈では，ネガティブなイベントは日常的に直面することが多く，測定のバイアスを小さくするためには日常的にそれぞれの状態を測定する方法が有用であると考えられる。研究3では，日常的に認知機能や感情の状態を測定できる経験サンプリング法を用いて自己注目とSRW，ネガティブ感情との関係を検討した。

1日に5回WebアンケートのURLをeメールで送付し，受信時の自己注目，SRW，ネガティブ感情を測定した。回答が有効であった23名の測定結果を用いて階層線形ベイズモデリングを行った結果，ネガティブなSRWとの関係性の強さは日常的な自己注目を高める影響性が示された。また，日常的な自己注目の高さは日常的なネガティブ感情の高さを予測する先行研究[i]と類似した結果を示した。

3.4. 事例

筆者の臨床実践から，「映像化」を使った自己注目により，子どもとの関わりの中での自分の状態をフィードバックし，家族との適切な関わり方を共同で模索していく過程を検討した。面接経過から，視覚的な情報を用いたフィードバックが家族間での問題解決行動に結びつき，家族への有効な関わり方を身に着け，さらにクライエント本人の社会的行動が増加したことが確認された。

4. 考察と今後の展望

以上3研究から，SRWを用いて自己注目の機能性を区別できる可能性が示され，自己についてのネガティブな情報と自己とを関連づけるような非機能的な自己注目のあり方は不安が増大した際のネガティブな反復性思考(研究2)や日常的なネガティブ感情(研究3)を高めることが明らかとなった。また，この傾向は社交場面においては他者からのネガティブな評価を怖れる(研究1)要因ともなる可能性も考えられる。

事例からは，これら3研究で指摘された自己注目スタイルの変容が面接過程から観察された可能性が示されたが，自己注目スタイルの変容過程には視覚的な情報を用いた自己注目が行われていた。したがって，自己注目スタイルが有効に変容されるためには各個人にあった方法論が選択されることが望ましいと考えられる。

以上から，テキストベースな方法論においては，今後SRWを用いて自己注目を捉え，日常的な場面を測定することで社交不安の維持メカニズムを解明し，介入方略を検討していくことが求められると考えられる。一方で，視覚的な方法論については未だ不明瞭な点が多いため，視覚的な情報を用いた自己注目の測定方法を開発し，社交不安やネガティブ感情との関連を明らかにし，各個人にあった測定方法や介入方法が選択されることで，より効果的に社交不安症が改善されることが期待される。

i. Moberly, N.J. & Watkins, E.R.(2008). Ruminative self-focus and negative affect: an experience sampling study. *Journal of abnormal psychology*, *117*, 314-323.

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　　村中　誠司　　）			
	（職）		氏　　名
論文審査担当者	主 査	准教授	佐々木　淳
	副 査	教授	老松　克博
	副 査	教授	足立　浩平

論文審査の結果の要旨

本博士論文は，社交不安症を維持する一要因である自己注目の機能性を行動的な観点から区別し，非機能的な自己注目が他の非機能的な認知機能やネガティブ感情に与える影響を明らかにすることを主目的として、３つの研究および事例研究を行っている。

研究1では、研究協力者33名に対し，ビデオカメラの前でスピーチをするよう求め，この映像からスピーチ中の自己の様子を客観的に振り返ってもらうビデオフィードバックを行っている。研究１の結果から，全般型の社交不安サブタイプは他のサブタイプと比較して社交不安曝露時の生理的反応の程度が同程度であっても，生理的反応について他者からネガティブな評価をされると考えやすい傾向が明らかになった。

研究2では、146名に対する質問紙調査を企画し、自己注目の機能性を，自己に関連する単語（以下，SRW）を列挙する行動的な指標から区別することを試み，また、非機能的な自己注目と関連するSRW指標がネガティブな反復性思考に与える影響を明らかにしている。研究２の結果、SRWを多く出すほど機能的な自己注目傾向が高く，ネガティブなSRWとの関係性を強く感じているほど非機能的な自己注目傾向が高い。また人前で失敗した場面を想定した時の不安の高まりはネガティブな単語との関係性を高め，ネガティブな反復的思考を高めることが明らかになった。

研究3では，日常的な場面でのSRWとネガティブ感情との関係を経験サンプリング法を用いて測定し検討している。1日に5回WebアンケートのURLをeメールで送付し,受信時の自己注目,SRW,ネガティブ感情を測定した。回答が有効であった23名の測定結果を用いて階層線形ベイズモデリングを行った結果,ネガティブなSRWとの関係性の強さは日常的な自己注目を高める影響性が示された。また，日常的な自己注目の高さは日常的なネガティブ感情の高さを予測する先行研究と類似した結果を示した。

そして、事例研究では筆者の臨床実践から，「映像化」を使った自己注目により，子どもとの関わりの中での自分の状態をフィードバックし，家族との適切な関わり方を共同で模索していく過程を検討した。面接経過から，視覚的な情報を用いたフィードバックが家族間での問題解決行動に結びつき，家族への有効な関わり方を身に着け，さらにクライエント本人の社会的行動が増加したことが確認され、臨床実践の中での自己注目の操作の重要性が強調された。

本博士論文は、臨床心理学の分野の中でも、心理現象のメカニズムを実証的に解明することをミッションとする異常心理学の分野において高く評価するに値するものであり、加えて、古くて新しい「自己注目」という心理学研究のテーマに対して新たな切り口を提供した。また、臨床実践の自己注目の重要性にも触れることで臨床実践への架橋を試みており、今後本研究の価値がより高まることが期待できる。

以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。